The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『類集抄』から説話へ
Author(s)	剣持, 雄二
Citation	大阪大学古代・中世文学研究会会報. 1985, 2, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『類集抄』から説話へ

剣持　雄二

『類集抄』は興福寺の蔵俊僧都の編著になるものと考えられる資料で、現在大谷大学図書館に比較的新しい写本ながら、原型をよく伝えている写本が一本知られているのみである。蔵俊は治承四年（一一七七）に示寂した学僧で、当時低迷していた学問の権威を高め、唯識・因明といった教学の分野で不朽の業績を残したことが知られている。この『類集抄』は、そうした教学の問題を論じたものではなく、多くの経論疏の類から「釈迦」「薬師」「彌勒」あるいは「阿弥陀経翻訳時代」「大般若経事」といった主題ごとに、説話や説明の記事を抜き出したものである（詳しくは拙稿「蔵俊僧都作『類集抄』について」「待兼山論叢」〈文学編、第一六号・一九八二年一二月〉を参照のこと）。取材源は右のように経論疏（偽経も含む）に限られて

いて、天竺・震旦の説話のみが収録されている。引用態度は原典をそのまま記述するか、あるいは多少の省略をおこなう程度で、興福寺に伝わっていた経典類の本文を知る上で貴重な意味を持つ。そればかりではなく、それまで教学面に比べて論じられることの少なかった興福寺乃至は法相宗における信仰の状況が、いくぶんなりとも解明されていく手がかりとなると考えている。

ここでは『今昔物語集』巻六・第6話における法相宗的要素が、『類集抄』の記述によってどのように確認されるか、一つの試みとして考えてみたい。

この「玄奘三蔵、渡天竺伝法帰来語」と題された説話は、次のような要素からなっている。

Ⅰ　天竺へ渡った玄奘は、広野の中で鬼の難に遭うが、般若心経の功徳で難を逃れる。

Ⅱ　その般若心経は、山中で「瘡ノ病」をわずらった女人（実は観音の化身）の全身の膿を、慈悲の心からなめて治した時に得たものである。

Ⅲ　玄奘はマカダ国の戒賢論師より法を授けられる。師は夢で文殊・彌勒・観音の三尊から、玄奘の到来を告げられていた。

Ⅳ　恒伽河で海賊に出会った玄奘は、天神のいけにえにされかかるが、兜率天の彌勒を念じる間に天変が起こり、悔悟した賊に戒を与える。

Ⅴ　戒日王より与えられた不思議の鍋を所望する竜王は、玄奘が信度河を渡る際船を傾ける。法文が沈むのを恐れた玄奘はその鍋を竜王に与える。

これらの要素のうち、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴは、いずれも『打聞集』第九話に同文的説話が見られる。これは『今昔』と『打聞集』とが直接の書承関係にあるのではなく、共通の資料に拠っているものと考えられている。Ⅲ・Ⅳについては、『大慈恩寺三蔵法師伝』（『慈恩伝』）を原拠とするが、前者は直接には『三宝感応要略録』巻下・一七に拠っているようである。『今昔』編者は『打聞集』の説話に近い資料をもとにして『慈恩伝』を原拠とする説話をはめこんで、一つの話を構成したと考えてよさそうである。

これら『慈恩伝』を原拠とする話は、もとより法相宗系の説話と考えられるが、内容的にはどこが法相宗的なのだろうか。今しばらく、本文に即して見てみたい。

Ⅲの説話では戒賢論師によって、夢の中で三尊から玄奘の到来が告げられたことが語られる。そこでは三尊がそれぞれ、金色、瑠璃色、白銀色の天人の姿で現れる。まず三尊が、論師に過去の罪への懺悔を勧めた後、金色の天人が瑠璃色の天人を指して、それが観音であることを告げる。次ぎには白銀色の天人を指してそれがこ彌勒であることを語る。ここで論師は初めて口を開いて、「我レ、常二兜率天ニ生レムト願フ。速疾彼ノ天ニ生レテ慈氏ヲ礼拝シ奉ラムト思フ」と語り彌勒の「汝、広ク法ヲ伝ヘテ後ニ生ルヽ事ヲ可得シ」との言葉を得る。最後に金色の天人が自らを文殊と名乗り、玄奘の到来と彼に法を伝えるべきことを語って夢は終わる。

『類集抄』の「文殊」の項にも右の話が簡略ながら記されている。

我（戒）賢論師欲困病永死、文殊示夢令造十七地論伝通三蔵、以此思之文殊師利法相宗学給也（返点は原文通り）

ここで「十七地論」とあるのは、同じく「彌勒」の項に見られるように（『大唐西域記』が原拠）、无着菩薩が彌勒より授けられた論書の一つであった。ここには何らかの混乱が、文殊と彌勒との間でおこっているのであろう。文殊と彌勒のつながりについては「文殊」の項に、釈迦如来が涅槃に入るのに先立ち文殊に命じたとして次のように記される。

末法衆生不修禅恵不讃経典不識文字、是故我以大神通力遍歴諸国令改悪修善習読三蔵令法久住、至彌勒下生以経典法衣令相付属云々

この文脈では「以大神通力」の主体がいくぶん曖昧だが、おそらくは文殊に末法の衆生と仏法の保護を指示したとして間違いはないだろう。仏涅槃の後、彌勒下生までの無仏の時代に文殊が衆生のよるべになるとするわけである。さきの『今昔』の説話で、文殊の化身である金色の天人が主導的な役割を果たしていたのは、意味の無いことではなかったのである。また彌勒の化身である白銀色の天人に論師が兜率天上生を願ったのも、代々の法相宗の学徒が上生を願ったように、そして修学する教えが「慈氏宗」だとされる（『類集抄』「彌勒」の項）ように、これも当然の行為であった。

紙数の関係からこれ以上の追求はできないが、今後もより方法を深めながら、南都系ことに法相宗系の説話を検証する方向で、説話集とりわけ『今昔物語集』の諸問題にとりくんでいきたいと思う。

（大学院博士後期課程）